

# ブエノスアイレス日本人学校における国際理解・現地理解と実践

前ブエノスアイレス日本人学校 教諭

和歌山大学教育学部附属小学校 教諭 北 端 一 喜

キーワード：国際理解，現地理解，修学旅行，現地校交流

## 1. はじめに

はじめに、アルゼンチン共和国は、南アメリカ大陸の南端に位置する国である。人口は4000万人余りであるが、大半が首都ブエノスアイレスやその近郊の都市に住居を構える。1810年にスペインより独立し、200年を向かえたが、スペインをはじめヨーロッパの国々の歴史・伝統を色濃く残している。公用語はスペイン語である。クリオージョと呼ばれる原住民の子孫も存在しているが、イタリア系移民が大多数を占めているのが現状である。

日本の真裏に位置するアルゼンチン共和国の自然や文化、教育に直に触れることで、両国それぞれの文化のよさや違いに気づき、国際的視野を身に付けることをねらいとして、ブエノスアイレス日本人学校では国際理解・現地理解に取り組んでいる。以下、その実践を紹介する。

## 2. ブエノスアイレス日本人学校の国際理解・現地理解の取り組み

ブエノスアイレス日本人学校では、国際理解のために中学部2年生と小学部6年生でアルゼンチン国内への修学旅行を実施している。現地を離れ、世界遺産に登録されているアルゼンチン国内の観光地を訪れたり、南米特有の自然や文化、生活様式などに触れたりすることによって、より知的好奇心をもち、自己内の新たな発見を促すことをねらいの一つとしている。

また現地理解として、近隣のEnglish校や日本語教育をカリキュラム化している日亜学院の2校と交流を図り、スペイン語やアルゼンチンの文化、教育、生活により親しみを感じられるようにしている。

## 3. 実践例

### (1) 修学旅行の取り組み（2012年度）

毎年、中学部2年生と小学部6年生を対象に、広くアルゼンチン全土の自然・文化・歴史などを直に触れることで、母国日本と対比したり近隣の国々との関連に目を向けたりできる国際的視野を育むことをねらいとして、修学旅行を実施している。また、事前指導においては個人の研究テーマ（現地で見たいこと・学びたいこと・調べたいことなど）を決め、インターネットや文献、パンフレットなどを用い、修学旅行への目的を一人一人にしっかりと掴ませてから実施している。

#### ① 事前指導

2012年度の修学旅行先は、アルゼンチン第2の都市で歴史ある【コルドバ】であった。子どもたちは、興味関心のある建築様式や自然（植物の共生）、世界遺産などについて、それぞれ事前調べに取り組んだ。

#### ② 修学旅行体験（行程から）



アルゼンチン国内は、アンデス山脈を除くと“パンパ”で知られるように、ほとんどが平らな草原だと思われる。しかし、各地には日本のように小高い丘になりトレッキングに適したところや保養地として有名な山間部もある。【コルドバ】は、世界遺産に登録された建物以外に、トレッキングに適したLos terrones（ロス テローネス）という丘陵地が近郊にあり、また、国内唯一の洞窟探検が行える場所もある。そして、第2次世界大戦末期に、日本人外交官達が軟禁されたと言われるHotel Eden（ホテル エデ

ン)もあり、戦前・戦中の歴史や生活様式、日本との関係などが学べる建物もある。

Los terronesでのトレッキングでは、南アメリカ大陸の隆起の足跡や地層の重なり、共存共生する植物の不思議を実際に目にすることができた。また、Hotel Edenでは、スペインの植民地時代ヨーロッパ人の避暑地、保養施設として栄えていた様子、大統領の特別宿泊施設、ダンスホール、日本人が軟禁されていた小部屋などを見ることができた。(1日目)



Caverna de El Sauce (カベルナ デ エルサウセ)では、つなぎの服に着替え、地下数十mの洞窟へ。雨季と乾季が分かれていて、雨量が少ないこの洞窟内では、ミネラル系の鉱物が100万年にわずか数cmしか伸びないという神秘的な



現象を目の当たりにできた。また、【コルドバ】市内に戻り、カビルド、カテドラル、モンセラート中学校、コルドバ大学(世界遺産登録された区画内に位置する大学の一部)、ヘスス教会などを見学し、世界遺産登録された背景やバロックの建築様式のすばらしさ、豪華絢爛な装飾品、キリスト教会が世界に普及活動を展開した歴史などを現地ガイドとして通訳をお願いした井垣氏(コルドバ大学で南米文化の博士課程を習得するために在住されている日本人)に説明を受けた。



### ③ 事後指導

ブエノスアイレス日本人学校では、全校児童・生徒と保護者に修学旅行後の報告会を実施している。2012年度も、旅行から約1ヶ月後の1学期の終わりに会を開いた。本校は極小規模校(全校児童生徒20名前後)で、在籍年数も比較的短いので、自分が修学旅行実施学年に至るまでに帰国する子どもがほとんどである。故に、アルゼンチン国内の様子をしっかりと聞くことのできるこの報告会を楽しみにしている。

担任をした小学部6年の児童3名は、報告書をプレゼンテーションの形式にまとめ発表した。一人は、世界遺産に登録された建物の建築様式に興味を持ち、事前調べでは、バロック建築について調べていた。修学旅行で実際にそのバロック建築を目の当たりにして、「世界各地にバロック建築の建物にはどんなものがあるのか?ゴシック建築との違いは何か?」などに目を向け、これから先の見通しを交えながら発表した。もう一人は、アルゼンチン国内には数カ所洞窟はあるが、唯一洞窟探検できる今回のカベルナ デ エル サウセの不思議をまとめ、そこから、世界の有名な洞窟を調べたり、洞窟のでき方、洞窟の種類などをまとめたりしていくことを報告した。最後の一人は、世界遺産に目を向け、アルゼンチン国内の世界遺産、日本の世界遺産についてまとめ、クイズ形式でプレゼンテーションを行った。そして、今後は、世界遺産の数、どの国が一番多いか、世界遺産登録基準などについて調べていきたいという思いを発表した。

国際理解という観点から、アルゼンチン国内の文化、自然、歴史などを学び、視野を世界に広げていけるような学習計画をしっかりと押さえることができた。

## (2) 現地校交流

例年、ブエノスアイレス日本人学校では、近隣のEnglish校と年間2、3回の交流を、日本語教育のカリキュラムを実施している日亜学院とは、5月の運動会への招待(小学4年対象)、2月の1週間日本人学校体験、春休み中の日亜学院体験の交流を実施している。

### ① English 校との交流

低・中・高・中学部の4つに分けて、それぞれの発達段階に応じて取り組みを進めている。English 校の児童・生徒が来校するときには、日本の伝統的な遊び（剣玉・おはじき、折り紙など）、文化（書道・箸の使い方・歴史的建造物など）、食文化（手巻き寿司）などをスペイン語で説明したり、実際に体験したりしてもらいながら学んでもらう取り組みを行っている。



普段、週に1回スペイン語の授業を能力別に分けて学習しているが、実際この交流での説明のために、必死にスペイン語講師に単語を教わったり、発音を聞きに行ったりして、スペイン語の需要を肌で感じる取り組みになっている。

また、こちらが訪問するときには、アルゼンチンの国技と言っても過言ではないサッカーとホッケーを通して、交流を深めることが多い。片言のスペイン語ではあるが、スポーツを一緒にしたり、自己紹介や今好きなこと、はまっていることなどを話し合ったりすることで、現地校の雰囲気満喫できている。しかし、引込み思案の子が多く、スペイン語の授業の重要性も感じている。

### ② 日亜学院との交流



日亜学院の授業風景

日亜学院は、今から約40年程前に、日系移民の2世、3世のための日本語講座からはじまり、現在では、午前中はスペイン語で授業、午後は週に3日が日本語教育、2日が英語教育というカリキュラムで授業を行っている小・中・高を併設する現地校に属する私学である。この日亜学院とは、30年ほど前から交流を続けて行っている。また、子どもたちの交流だけでなく、お互いの教職員も授業参観を行い、日本語教育のあり方や教授法について研修を行っている。

日亜学院の児童・生徒とは、年に3回交流をしている。1回目は、本校の運動会に小学4年生を招待し、一緒に競技に参加してもらっている。2回目は、2月上旬に本校への1週間の体験入学。小学部を中心に10名前後の子どもが毎年ブエノスアイレス日本人学校に日本語教育を学びにきてくれている。以前は、日系移民の子息が多かったのだが、近年は中国人やアルゼンチンの子どもがほとんどになった。この1週間は、日本人学校のカリキュラムで、ほぼ日本語だけで授業を行っている。自ら日本語を学びたい、日本の学校に興味があるという子どもたちなので、非常に馴染むのも早く、片言しかわからない日本語をどうにか駆使して子どもたちや我々職員ともコミュニケーションを一生懸命図ろうとしている姿は微笑ましく感じる。

そして、3回目が本校の秋休み（日本でいう春休み）の3月下旬の一週間。今度は日亜学院での体験入学になる。約1月前に本校で体験入学を行った児童・生徒と同じクラスに配属してもらい、午前中のスペイン語による授業の時は、時折通訳してもらいながら楽しく活動をしている。体験に参加した子どもたちは、この体験を通し、現地語（スペイン語）の必要性を肌で感じ、新年度からのスペイン語の授業では、今まで以上に学習に意欲的に参加するようになる。また、日本の学校と違い、休憩中におやつやハンバーガーなどを自由に食べながら友だちと遊ぶ姿に非常にカルチャーショックを覚えるようで、体験記を新学期に全校児童・生徒の前で発表するときには、そのことに多く触れている。

日本、また日本人学校の中だけでは決して味わうことのできない貴重な体験を通して、子どもたちの現地地理解は急速に深まっていくように感じられる。

## 4. おわりに

保護者の仕事の関係で海外生活を余儀なくされ、それぞれの在外教育施設で学ぶ子どもたちにとって、現地で

の生活、現地での体験は、国際的視野を身に付ける非常によい機会であると考え。在外教育施設の教育理念の根本である、「海外の地であっても学習指導要領に乗っ取った日本の教育を」という概念は、派遣教員にとって大切にしなければならないことだが、現地校交流や様々な体験活動を通して、子どもたちの国際性を育むことも大切な使命の一つである。それぞれの教育事情、生活事情を踏まえ、子どもたちに生きた教材として学ばせる国際理解・現地理解の推進を今後も続けていってくださることを願っている。

今回の派遣が2回目となった者として、世界各国の在外教育施設での様々な国際理解教育・現地理解教育の取り組みが、子どもたちの国際性を豊かに育む一因となることを切に願っている。また、日本国内の教育現場に復帰した今、海外生活の経験のない子どもたちに、いかに国際性（グローバル思考）を身に付けさせていくか、その手立てを今後も探っていきたい。